# かささぎ 通信 第54号

2017年3月10日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」


**二〇一七年二月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和10年6月号「蝶々」、8月号「雀とり」、9月号「夜中」を読みました。「蝶々」と「雀とり」の報告をします。**

「蝶々（童話）」（森三郎）は、六年生のみさ子たちの唱歌の時間の話です。ポカポカした春の陽気に蝶々が教室へ舞い込んできました。安井先生が突然、この前教えた「たんぽぽ」の曲で唱歌の試験をするというのです。みさ子の番になって、みさ子は大きな声で歌おうとするのですが、歌い出しが弱かったせいか、なかなか声が出ません。ところが、一節の終わりころ、何がおかしいのか、みんながどっと笑ったので、歌い直しになります。今度は大きな声で無事に歌い終わりました。隣の席の保子さんに聞くと、みさ子の頭に蝶々が止まったからみんなが笑ったのでした。

「たんぽぽ」は詩・西條八十（『赤い鳥』大正十年六月号掲載）、作曲・草川信の歌で『赤い鳥』大正十年十月号に掲載されています。発表当時森三郎は十歳でした。兄の銑三は二十六歳、高崎市南小学校で代用教員をし、童謡誌『小さな星』を作っていた頃です。兄が教材用に使うので、兄から送られてくる『赤い鳥』の、「赤い鳥童謡」の楽譜の頁は切り取られていることが多かったと、三郎は回想しています（『ももんが』森銑三氏追悼特集・昭和61年4月号　「小さな星」音楽会）。この「たんぽぽ」も、銑三が高崎の小学校の教室でオルガンを弾いて子どもたちに教えていたかもしれません。

唱歌の時間を題材にした森三郎の童話はこれまでに、「ハーモニカ」（昭和8年10月号）、「ピアノ」（昭和9年3月号）、「さいかち虫」（同年9月号）等がありました。

「雀とり（童話）」（森三郎）は、光男が敏ちゃんから教わった雀とりの方法を試してみる話です。その方法は、酒粕を少し載せた柿の葉と小石を屋根の上に置き、雀が酒粕をつついて酔っ払って、石ころを枕にし葉っぱの布団の上で寝てしまうのを待つというものです。そのうちに柿の葉に巻き込まれた雀が屋根から落ちてくるところを生け捕りにするはずですが、実際にはなかなかそうはいきません。

この雀とりの方法は落語の「鷺とり」のマクラとして語られたり、椿の葉で雀を巻き取る昔話もあったりするようです。森三郎が江戸時代の咄本（はなしぼん）に興味を持っていたことは『かささぎ通信』第49号でも紹介しました。この「雀とり」の話は、そういう昔の笑話を昭和初期の子どもの遊びとして童話に仕立てたもののように思います。

兄の森銑三には江戸の笑話についての論考があり、池田孝次郎、柴田宵曲との共著「日本人の笑」（昭和十七年）という著書もあります。兄弟ともに明朗な笑の文学を好んでいたようです。三郎の『赤い鳥』作家としての出発は、兄が刈谷新三郎の名で、友人の萩原恭平と訳した小泉八雲の「約束を守る」を子ども向けに書き直した「赤穴宗右衛門兄弟」でした（「森三郎の作品を読む会通信」第4号参照）。この当時銑三は小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）に夢中になって、萩原恭平とともに八雲の原文を訳しています。おそらく『霊の日本』（一八九九年）も読んでいたことと思いますが、その中にA PASSIONAL KARMA（恋の業）という、落語家の円朝による「怪談牡丹灯籠」を題材にした作品があります。その主人公が「萩原新三郎」です。友人の萩原と銑三が二人で一人のように八雲作品を翻訳していたから、刈谷新三郎というペンネームをつけたのだろうか、そのような遊びをしていたかもしれないと想像すると、銑三さん・三郎さんが近くに感じられます。

**次回予定　平成29年4月14日（金）午後1時～3時**

『赤い鳥』昭和11年初出作品

**8月号「狐の提灯」、「夕顔物語」、10月号「たんぽぽ」**